

わたしの主張2025 静岡県大会

～今、中学生が伝えたいこと～

発表文集



主催 静岡県教育委員会・静岡県青少年育成会議
独立行政法人国立青少年教育振興機構

表紙絵	齋藤 麻衣子	さん（御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校）
裏表紙裏絵	斉藤 紀花	さん（御前崎市立浜岡中学校）
裏表紙絵	中山 莉乃葉	さん（御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校）

発刊によせて



昭和54年の国際児童年を記念して始まった「わたしの主張静岡県大会」は、多くの方々に支えられ、本年度で47回目を迎えました。

本大会は、中学生が、学校、家庭、地域社会等で体験し、考えた事柄をみずみずしい感性で捉え、周囲の人々や社会に対してメッセージとして伝えることで、社会の一員としての自覚を高めることを目的として毎年開催しています。また、将来を担う中学生が心身ともに大きく成長するこの時期に、何を思い、

どのように成長しているのかを多くの県民の皆様にご覧いただき、青少年の健全育成への理解と関心を深めていただく契機となることも期待しております。

本年度は、県内の国立、公立、私立の中学校、特別支援学校138校から9,391点の応募がありました。日常生活のあらゆる場面で多様な気づきを抱く中学生年代らしい内容で、自身の個性や将来のこと、学校生活や日常生活のこと、家族や友人たちとのかわりの中で感じたこと、身近な社会的話題や世界的な課題など多岐にわたってありました。また、単なる問題提起や提案だけでなく、自分自身を見つめ直し、自身の意識や行動の変容につなげていこうとする作品も数多くみられました。

さて、去る8月21日に御前崎市民会館で開催した「わたしの主張2025静岡県大会」では、事前審査で選出された13人それぞれが、中学生らしい純粋でまっすぐな思いを、生き生きとした言葉で表現し、聴衆の皆さんへ共感と感動を与えておりました。

本大会で最優秀賞を受賞された沼津市立片浜中学校の加藤蒼士さんは、人との関わりの中で感じた寄り添う言葉の大切さや、AIとの向き合い方、将来の夢について、豊かな表現で聞き手を惹き込むように発表しました。

この文集は、県大会出場者の素晴らしい発表作品を掲載し、一人でも多くの皆様に、未来を担う中学生の頼もしい姿を感じ取っていただくために作成したものです。県内各地の青少年の健全育成の一助となれば幸いです。

結びに、本大会を開催するにあたり、多くの作品をお寄せいただいた中学生や、御協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも本大会に対して、御理解、御支援、御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和8年1月

静岡県教育委員会 教育長 池上 重弘

目 次

「わたしの主張2025静岡県大会」発表作文

最 優 秀 賞

人間になった僕ができること

沼津市立片浜中学校

加藤 蒼士

1

優 秀 賞

向き合って見える世界

沼津市立愛鷹中学校

金田 ゆな

2

地域と自分

浜松市立佐久間中学校

樽松 里哉

3

真のコミュニケーション

静岡大学教育学部附属浜松中学校

徳永 梨良

4

優 良 賞

私を作るもの

静岡県西遠女子学園中学校

山下 ラリサ

5

食わず嫌いをやめて

三島市立中郷中学校

石渡 葉奈

6

脱マスクの時代で

静岡市立豊田中学校

一杉 奈緒

7

戦争のない世界へ

静岡県立中央特別支援学校中学部

若林 純那

8

「私たちに託されたもの」

御前崎市立浜岡中学校

伊藤 亜姫

9

伝えたい思い

清水町立清水中学校

坂部 いろ花

10

マスクとわたし

磐田市立豊田中学校

山下 ひなた

11

中学生である今、私たちに求められていること

静岡市立服織中学校

芦沢 真央

12

挑戦を恐れない

吉田町立吉田中学校

堀川 莉花

13

◇講評（審査委員長 堀内 祥行）

14

◇大会の様子

15

◇静岡県大会開催概要

17

◇原稿募集要領・審査基準

18

◇地区審査会出場者一覧

20

◇「わたしの主張静岡県大会」のあゆみ

21

◇「第47回少年の主張全国大会」内閣総理大臣賞受賞作文

23

◇ 同 文部科学大臣賞受賞作文

24

最優秀賞

人間になった僕ができること

沼津市立片浜中学校 3年 加藤 蒼士



そこに、愛はあるんか！僕は心の中でこう叫ばずにはいられませんでした。

2年前、40度近い高熱が出た僕は病院に行きました。病院はかなり混んでいましたが、すぐに看護師がやってきて、検査をしました。そこから2時間程度待ち、ようやく自分の名前が呼ばれて先生の前座りました。するとその先生は顔も見ず、パソコンをパチパチ打ちながら言いました。

「インフルエンザだから。薬出しておきます。はい、お大事に。」

そう言って診察が終わりました。僕は会話することなく、病院を後にしました。わずか5秒といったところでしょうか。工場のベルトコンベアの上に乗って流れている機械部品は、きっとこんな気持ちなのでしょう。そんなことを思わずにはいられませんでした。なんと悲しいことでしょうか。診断は間違っていないし、薬もいただきました。おかげですぐに熱も下がりましたが、そうではない僕の中の違う熱が沸々と沸き上がり、頭の中で温度計の数字が徐々に40度を超えていきます。くらくらと、なのに沸々とした頭の中で、あの診察場面の5秒の映像が、何度も繰り返し再生されます。そこに愛はあるんか！そうつまり、愛、なかったです。この時から僕は、医者に対してネガティブな感情を持つようになってしまいました。

その1年後、神様のいたずらなのか、再び僕が機械部品になる機会が訪れました。またインフルエンザになったのです。あの時と同じ病院に行き、看護師による検査、そして長い待ち時間。なるほど、今僕はベルトコンベアに乗ったのだと、理解しました。名前が呼ばれ、先生のもとへ向かうと、前回とは違った先生でした。するとその先生は、不思議なことから話し始めました。

「学校はどう？部活やってるの？熱で休まないといけないから大変だよな。」

（あれ？ベルトコンベアが、止まった？）そこからしばらく中学校生活のことを話し、先生は何度も笑ったり悲しんだりの表情を見せてくれました。最後に先生は、この言葉を僕にくれました。

「でも大丈夫！すぐ良くなるよ。」

なんと力強い響きの「大丈夫」なのでしょう。この一言が、どれだけ僕にとっての薬になったのでしょうか。皆さん、安心してください！愛、ありました！

さて、良い医者とはどんな医者でしょうか。それはきっと求める価値によって変わるものだと思います。これらの経験を経て僕が思うのは、言葉の処方箋を出せる医者って素敵だなということです。病気を治すため、雑談などせず、とにかく1秒でも早く薬が欲しいという人もいますが、僕はもうベルトコンベアには乗りたくないのです。

最近、AIの発達によって医者が必要なくなる可能性があるというニュースを見ました。最新の医療と正確かつ迅速な診断、場合によっては手術も可能になるとのことでした。医者不足の解消にも繋がり、今後ますますAIの研究開発が進んでいくのだそうです。これは大変喜ばしいことです。でも、ちょっと待ってください。大事な事を忘れています。AIは、僕たちの日常生活の事、聞いてくれるのでしょうか？インフルエンザになったことで、バスケット部の練習試合に出られず、自分を責めて落ち込んでいた僕を救ってくれたのは、間違いなく、感情を持った人間の愛情ある先生の言葉でした。何でも便利になるからと、すべてをAIに頼ってしまうのは間違っていると僕は考えます。以前、病院のベルトコンベアに乗った経験のある僕が言うのですから、間違いありません。そこで、僕に1つの使命が降りてきました。医者になるという使命です。AIは正確な言葉を話すために、医療分野で「必ず」や「絶対」といった表現は使わないと聞きます。だからこそ、僕が患者さんに言ってあげたい。

「必ず治してあげるから、絶対に大丈夫！」と血の通った愛ある言葉を。そこに愛はあるのだと。



(ねえ、なんかあの人さっきから1人でしゃべってるよ。)

(あまり近くに行かないでね。)

通りすがりの親子が私の姉に放った言葉。私は怒りを覚えたが、聞こえないふりをすることしかできなかった。

私の姉は発達障がいを抱えている。その影響で姉は16歳の高校生だが、心の中はまだ6歳という差がある。そのため、特別支援学校に通い、高校生ながら幼児向けアニメを見たり、小学3年生の妹とよくおもちゃの取り合いをしたりしてしまう。歩いている途中に1人でごっこ遊びをすることはよくあることなので周りの人達からは「何だあの人」と言わんばかりの目で見られてしまうのだ。

そんな姉と過ごしてきて、冷たい言葉や視線は何度も感じたが、今でも忘れられない言葉がある。

何年前か前、家族と知人で花見をしていたときのことだ。私達が座っていた近くに桜の花がついている大きな枝が落ちていた。それを見た知人が、

「なあ、あの枝って絶対お前のお姉ちゃんが折ったよな。」

と私に言ってきた。

「どうして？折ってるところ見たの？」

そう尋ねて返ってきたのが、

「だってやりそうじゃん。」

という言葉だった。外から見てる人達にとって障がい者は、やってはいけないことも平気でやるすぐく手のかかる人、というイメージがしみついているんだなと分かり、とても悲しい気持ちになった。

この経験から私は、障がい者に対する偏見や差別の有無を調べてみた。内閣府の障がい者に関する世論調査によると、偏見が「ある」と答えた人が88.5%、「ない」と答えた人が9.8%（無回答1.7%）だった。このことから、障がい者の本来の姿がきちんと理解されていないことが分かる。

たしかに姉は、1人でいきなり話し出したり、みんなが簡単に行うことに時間がかかったりする。近寄り難く感じてしまうのも仕方がないのかもしれない。しかし、悪いところばかりではない。姉には

珍しい特技がある。それは予定を覚えることだ。例えば学校の年間行事。姉はこれを1回見ただけで1年分全て覚えてしまう。特出した能力を持っている人は姉だけではない。絵や歌が上手い人、一度行っただけで地図が書けるくらい道を覚えられる人もいる。全員が特出した能力を持っているわけではないが、私が出会った障がい者に共通して言えるのが、好きなことに一生懸命取り組み、純粋でピュアであるということだ。私も姉やその友達と関わり学ぶことがたくさんある。

学校で誰かがふざけると周りの人が

「障害者やん」

というツッコミを入れているときがある。聞くたびに私は、どういうつもりで言ってるんだろう？と疑問になる。ただ笑いをとるために軽いノリで言ったとしても偏見から出た言葉に変わりはない。これだけではなく、

「あまり近くにいかないでね。」

「だってやりそうじゃん。」

これらの言葉も偏見から出た言葉だ。障がいのある人と向き合わず遠ざけてきたうえに知っているかのように悪く言う。初めて会う人を信用しすぎないことは悪いことではない。むしろ危機意識を持つことは大切だ。ただ、その偏見だけで人の評価を下げるようなことを言うのはあってはならない。障がいを持っているとしても私達同様に個性や良さを持っていることに変わりはない。

私は一人ひとりが障がいのある人と少しでも向き合うべきだと思う。もし、あなたが障がいを持つ人と関わる時があったら、お互い1人の人間としてその人のことを知ろうとしてほしい。そうしたらきっとあなた自身にも学ぶことがあるはずだ。それはきっと、あなたの世界を豊かにするだろう。



浜松市立佐久間中学校 3年 樽松 里哉

私が住んでいる地域は、人口 117 人、世帯数は 69 というとても小さいところです。

隣の地域の人口は、853 人、世帯数は 454 となっていて、私が住んでいる地域の人口の約 7 倍になっています。しかも夏になると、キャンプ、鮎釣り、花火大会で隣の地域には多くの人が集まり、にぎやかになります。それに比べ、私の住んでいる地域は、人があまり集まらないため、とても寂しく感じます。

しかし、私の地域でも誇れるものはあります。それは、「川合花の舞」です。静岡県指定無形民俗文化財になっていて、鎌倉時代から伝わる湯立神楽になります。神々を迎え、五穀豊穡、無病息災を祈願して湯立て神事を行い、各種の舞を奉納します。花の舞が行われる日には、多くの人が見に来るため、川合もにぎやかになります。

私も地域の一員なので舞を披露します。しかし、現在の地域の人のみでは舞い手の人数が足りないため、佐久間町全体の子供たちに声を掛け、何とか人数を集め、伝統文化の維持に努めています。

現在、川合の学生は私 1 人きりです。以前は私以外にも子供はいたのですが、次々と引っ越してしまいました。その理由は私にも十分理解できます。川合には商店が 1 軒ありません。飲料の自販機が 1 台あるだけです。働くにしても浜松市の街中や、愛知県新城市、豊橋市まで通勤せねばなりません。将来のことを考えたら、仕方がないことだと思います。

このように過疎化が進む川合において、何をするにも先頭に立って引っ張ってくれる 3 人のおじさんがいます。「川合花の舞」や「夏祭り」、「資源回収」など、人数が少ない中で運営が大変でも、辛い顔を見せず、むしろ笑顔でいろいろなことに取り組んでくれる 3 人です。

私がこの 3 人の存在の大きさに気づいたのは、中学生になってからでした。新型コロナウイルスの流行によりしばらく中止になっていた「川合花の舞」が再開されたときです。小学生の頃は、「この地域はお店が 1 つもないし、遊ぶところもないので僕も引っ越したい。」と考えていました。しかし、3 人の、楽しみながら地元のために活動してくれている

姿を見て、「僕もこうなりたい。」と思うようになりました。

今、私には地域のために努力していることが 2 つあります。

1 つ目は、川合を訪れてくれた人や地域の人に、目を見て笑顔で挨拶をすることです。川合の住人の多くが高齢者であり、高齢者の方たちは子供と接する機会がほとんどありません。だから、私が挨拶することで、少しでも元気を分けられたらいいなあ、と思って行動しています。

2 つ目は、伝統文化の継承です。中 2 の春休み、おじさん 3 人と自治会長さんからバーベキューに誘ってもらいました。そのとき、「今年、地域でやりたいことはあるか？」と聞かれました。私はすぐに「夏祭りの再開と花の舞で鬼を舞いたいです。」と答えました。すると、3 人は「君がやりたいことをサポートするから頑張ってくれるかい？」と言ってくれました。私は胸を張って「はい！」と答えました。このように自分がやりたいことを積極的に発言することで、それが現実になることがあるのだと分かりました。だから、地域の人への感謝の気持ちを言葉にしたり、頑張る姿で表現したりしています。

皆さんにも大切にしてほしいことがあります。

1 つ目は、楽しい生活の裏には地域の人の頑張りと努力があるということです。祭典や安全な登下校など、当たり前だと思っていることは当たり前ではないのです。だからこそ、地域の人への支えがあることを忘れないでください。

2 つ目は、地域を愛するということです。今は地域の良さに気づいていなかったり、分からなかったりする人もいることでしょう。しかし、いろいろな視点で地域を見れば、良さが見えてくるはずですよ。だから、その良さを愛し、大切に生活してください。私はこの先、地域を愛し、地域から愛される人になりたいです。



静岡大学教育学部附属浜松中学校 3年 徳永 梨良

「次の信号を左に曲がって直進すれば、浜松駅が見えます。Turn left at the next traffic light and go straight and you will see Hamamatsu station.」自分が話した言葉が瞬時に翻訳され、形を変える。そんな姿を30年前、誰が想像したでしょうか。

2025年の今、様々な翻訳アプリが開発され、コミュニケーションや旅行などの場面で大きな活躍を遂げています。そして翻訳できるのは英語だけでなく、フランス語、中国語、スペイン語など幅広くなっています。

こんな素晴らしい機能、使わずにはいられない、あなたもきっとそう思っているはずです。しかし、それは本当に私たちの生活をより良くしているのでしょうか。そして、それを何気なく使っている私たちは本当に「真のコミュニケーションをとっている」といえるのでしょうか。私がそう思うようになったのは、海外での体験学習がきっかけです。

以前、学校の体験学習でシンガポールを訪れました。初めての文化、初めての体験、そしてもちろん英語が当たり前の世界に飛び込むことに、私は期待に胸をふくらませていました。活動の中には、現地の大学生と市街地を回るといった研修があり、私は積極的に英語でコミュニケーションをとりました。

あるとき、現地の大学生の話している内容がわからない場面がありました。そこで大学生が翻訳アプリを通して教えてくれたとき、私の頭に1つのもやもやが浮かんだのです。

「大学生が伝えたかった想いを直接受け取ることができなかった。心を通じ合わせることができなかった……。」と。

それ以降、私は翻訳アプリを使って会話をするのに対して、あまり積極的にはなれませんでした。なぜなら翻訳アプリに頼ると頼らないのでは、相手への想いの届き方が変わってしまうからです。

例えば、あなたが日本に旅行にきた外国人に「日本に住むことで感じる日本の良さはなんですか。」と聞かれたとします。そこで、あなたは「トイレやお風呂の清潔さと技術が素晴らしいところです。」

と答えたいと思いました。もし翻訳アプリに頼らず直接伝えるのであれば「The toilets are very clean, and the technology is also excellent.」となります。しかし、アプリを使ってみると「The cleanliness and technology of the toilets and bath are excellent.」と訳されます。

一見同じような会話でも、翻訳アプリを使わない方が誰に対しても「やさしい英語」になっていると思いませんか。そして自分の言葉、想い、表情で心からの想いが伝わります。しかし、翻訳アプリを使った場合はどうでしょう。間にアプリが入ったせいで、人と人との「心の会話」が途切れ、すべてが「作業」に変わってしまうのです。「cleanliness」のような固い言葉を使い、あなた自身の「想い」は小さくなってしまいます。

先が見えず、日々争いの絶えない今の時代だからこそ、外国語でも翻訳アプリに頼らず自らの言葉を使って「真のコミュニケーション」をとることが大切なのではないでしょうか。翻訳アプリが読み上げるのは、固い感情のない世界です。そしてそのまま何も考えずに使用していると、自分から学ぼうとする力のなくなった受け身の人生が待っています。そんな人生、私はいやです。自分の言葉で、気持ちで、表情で伝えるからこそ、相手と「想い」が通じ合います。そしてそこに、大きな価値が生まれるのです。

私も、翻訳アプリに頼りすぎず、自らの力で、「真のコミュニケーション」をとります。

アメリカの政治家ベンジャミン・フランクリンがこのようなことを言っていました。

「自分で求めて学ぶ者は、他人に教えられるよりもずっと多くを得る。」

真のコミュニケーションでどれだけ広い世界をつくれるか。それは、あなた次第です。



15歳、今の私を作るものは何かと考えた時、2つの自分が浮かんだ。

1つはバレー部キャプテンとしての自分。もう1つはブラジルに祖先を持つことを、常に誇りに思えるように育ててくれた家族の一員である自分だ。

バレー部のキャプテンを引き継いだ時、私は途方に暮れていた。「リーダーって何だろう？」私の中でリーダーとは「何でも出来る完璧な人」だった。それは小学生の時の体験に遡る。小学生でもバレーをしていてチームのキャプテンだった私は、ある試合に臨んでいた。その日はミスを連発し、監督からタイムアウトの時間に呼び出された。そして私が大事にしていたキャプテンマークを、みんなの前で外されそうになった。屈辱的だった。その時から「ミスをしたらキャプテンをはずされる」という恐怖心が頭に巣くい「完璧でなくてはならない」という思いが呪文のようにこだました。キャプテンとは、監督の教えには忠実に従い、みんなからは完璧にプレーをする人だと思われるものだと思っていた。私は私の作ったリーダー像にがんじがらめだった。

そこから抜け出せないまま、中学3年生でキャプテンになって、悩みに悩んだ。なぜなら、中学のチームスタイルは小学生とは全く違って、監督からのトップダウン式ではなく、一人一人が色を出し、みんなで作上げるものだったからだ。だから、キャプテンとして自分がどうすればいいか分からなかった。

監督の指示等待っていても降りてこず、焦って周りも見えなくなり、チームメイトのダメなところばかりが目についた。自分のプレーもうまくいらず、選手としても伸び悩んだ。1人で考えても袋小路で、恐る恐る先生に相談をした。出た結論は「声をかける」ということだった。ダメだしではなく出来たところを褒める。チームメイトの持ち味を把握して、「ここまで出来てる。後はここをもうひと押し」等と声をかける。難しい言葉ではなく、分かりやすい言葉で、シンプルに。最初はしどろもどろだったが、チームメイトの好いところを見るように視点を変えて、声をかけるようにした。そのうち先生が「変

わったな」と言ってくださった。「これでいいんだ」と自信が持てた。認められると自分の出来る範囲が広がり、チームにも好循環が出来た。今はお互いを認め合って、チームカラーを作り大会に臨んでいる。これが私なりのリーダーシップだと今は胸を張って言える。

もう1つの私を作っているものは、家族の一員としての自分だ。父と母は20代でブラジルから日本に渡ってきた。両親はブラジルのいいところ、例えば宗教を大切にするとところや団結する力を私に授けてくれた。そして日本のいいところ、例えば献身と感謝の気持ちを育ててくれた。両国の文化の良いところを私に教育してくれた。ブラジルの祖先を持つことも誇りに思っているが、日本社会の一員であるということも私は誇りに思っている。私の中には両親の思いが生き続けていると感じる。この家族の思いに囲まれて15歳の自分がある。

この先いろいろな場面でリーダーとなる時が来るだろうし、ブラジルと日本の懸け橋となる時がくるかもしれない。その時に両親から伝えられた、2つの文化の誇りを持ち、どんなコミュニティに属していてもリーダーシップを発揮し、より好い関係を築いていきたいと思う。バレー部のキャプテンとして学んだ、一人一人を認め、その人の良いところを活かし、お互いに成長出来る、みんなが幸せになるリーダーシップを意識していきたい。そして、ブラジル人や日本人を超えた、大きな意味でのシチズンシップを持って生きていきたい。



みなさんは今、解決できない迷いや不安、疑問や不満を感じていますか？

私はこの春休み、周囲から「らしくない」と言われる選択をしました。私は5歳からピアノを習っていて、中学2年の目標は、春休みに行われるピアノコンクールの全国大会に出場することでした。秋の予選会を経て、全国大会の練習を始めた頃、交換研修生として春休みに台湾でホームステイをしてみないか、と声をかけて頂きました。今までの私なら、台湾行きを決意することはありませんでした。それは、全国大会と台湾研修の日程が重なっていたからです。しかし私は悩んだ末、台湾研修に参加することを選択しました。私は今まで何よりも大好きなピアノを優先してきたので、今回の選択に、周りの人は驚き、自分自身でさえも「らしくない」選択をしたと思っています。なぜ、今回台湾へ行くことを選択したのか。2つの理由があります。

1つ目は、兄がアメリカでホームステイをしたことをきっかけに、海外へ興味を持ったからです。

2つ目は、音楽大学の先生にピアノのレッスンをして頂いた時、「あなたはピアノ以外に習いごとはしていないの？吹奏楽は？ピアノしか弾いてこなかったの!？」と言われたからです。これは私がピアノ以外に無関心なことが音楽に現れているという厳しいご指摘でした。今までの自分の努力を全て否定されたようで、言葉が出ないほどショックでした。また、私の学校に吹奏楽部はないので、先生の言葉は理不尽にさえ聞こえました。そんな時、台湾研修のお話を頂きました。先生の言葉がずっと心に残っていた私は、ピアノを優先せずに、台湾へ行くことを選択しました。

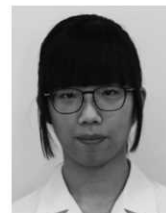
台湾では「自分への挑戦」を目標に、国際交流にチャレンジしました。日本で人見知りの私は、中学校訪問で沢山の友達を作ると決めました。友達100人出来るかな？という歌がありますが、100人どころか250人もの友達ができました。日本で食わず嫌いの私は、出されたものは必ず一口は食べる！と決めました。アヒルの血の塊、という味の想像もつかない食べ物に挑戦したことは、自分を褒めてあげた

いです。私が苦手な食べ物をホストファミリーがおいしそうに食べる姿を見ているうちに、私が食べ慣れていないだけで、台湾に生まれていたらおいしく食べていたのだろうと思うようになりました。食の好みとは経験によってできるものだと気が付いた時、食わず嫌いの私は、日本で沢山のチャンスを逃してきたのだと思いました。

台湾に滞在していた1週間、自分への小さな挑戦を繰り返したことで、今まででは考えられないほど様々なことへの興味が湧き、沢山の経験を積むことができました。それは、台湾への理解や人々との交流を深め、私の視野を広げる素晴らしい機会となりました。

今、先生の言葉を思い出してみると、興味や経験が足りないと言われたことが、納得できます。私は経験できないのは環境のせいだと腹を立てていましたが、経験するチャンスを自分が選択して来なかっただけなのだと気が付きました。チャンスとは特別な機会にだけあるものではなく、その日食べる物を決めるようなありふれた選択の中にもあるものです。経験するかしないかは、全て自分の選択で決まっていく。大切なのは「食わず嫌い」をせず、経験から視野を広げ成長すること。その繰り返しが自分を磨き、そこから生まれた音楽にこそ、価値がある。先生の言葉には、そんな意味が込められていたのではないかと、今なら思えます。

もし、みなさんが今、解決できない迷いや不安、疑問や不満を感じていたら、ぜひ、どんな小さなチャンスでもいいので、「食わず嫌い」をやめて、経験してみてください。「らしくない選択」をしてみてください。そこから得られる経験が、あなたの視野を広げ、今まで見つけられなかった新しい答えが、見えてくるかもしれません。



新型コロナウイルスの影響で、マスクを着けることが当たり前の日常が、約3年間続きました。コロナが収束して年月が経った今でも、マスクを着けるという習慣は、私の中でまだ完全に抜け切っていません。

2020年、新型コロナウイルスの感染症対策として、マスクの着用が義務付けられました。それから3年後の2023年、マスクを着用するかどうかは、個人の判断に委ねられました。約3年間続いたマスク生活は、コロナ禍前から同じ学校で生活していた友達の、マスクを外した素顔を忘れてしまうほど、長いものでした。ですから、素顔を見られるのが恥ずかしい、怖いなど、マスクを外すことに抵抗感を覚えた人は、少なくないと思います。

突然ですが、皆さんは「マスク詐欺」という言葉を聞いたことがありますか。マスクを着けている時のイメージと、マスクを外した実際の顔にギャップがある場合に使われる言葉です。私は、そんな「マスク詐欺」の被害者になったことがあります。「マスクを外した顔が、イメージと違った」と、陰口を言われていたのです。親が愛情深く育ててくれた命を、一人ひとりの多種多様な個性を「マスクで隠れた部分」という、ほんの一部でしかない要素だけで、勝手に批評し、難癖をつける人たちに、憤りを感じました。そして、自分は期待外れだったという事実が、まるでナイフのように、私の心に深く刺さりました。

このことがあってから、周りに人が居る時は、できる限りマスクを着け、マスクを外さなければならぬ時は、周りの視線を過剰に気にしながら過ごしていました。現在では、周りの視線を意識しすぎないようにすることで、マスクを抵抗なく外すことができます。ですが、マスクは今でも、周りの視線を跳ね返す盾のように私を守ってくれ、着けると大きな安心感が得られます。

世の中には、容姿に関する深刻なトラウマがあるなどの理由から、四六時中マスクが手放せない、いわゆる「マスク依存症」と呼ばれる人たちが居ます。中には、付き合っている恋人に素顔を見せるのが不

安で、マスクを外した顔を見せることができない人も居るそうです。いくら好きな人でも、ありのままの自分を見せられないほどマスクに縛られた生活は、きっと凄く苦しいと思います。

しかし世間では、マスクを着けないことが当たり前の時代に戻ってきています。マスクに対する価値観が変わりつつある今、私たちはマスクに頼った生活から卒業するべきなのでしょうか。

私は、マスクで顔を隠すことで、コンプレックスの悩みが和らぎ、安心感を得られると考えたので、心の安定のためにも、積極的に外すべきだとは考えません。

ですが、「マスクを外す勇気」も大切なことだと思います。ありのままの自分と向き合い、人との違いを受け入れることが、自己肯定感や、多様性のあり方にも、繋がってくるのではないのでしょうか。

しかし、容姿を批評し、偏見を持つ「ルッキズム」の風潮がある中で、「マスクを外す勇気」を出すのは、極めて困難なことです。ですが、ルッキズムの風潮を私1人の力だけでひっくり返すことはできません。だから、一人ひとりが、ルッキズムに対して自分なりの考えを持ち、容姿に対して軽率な言動や行動をしないことが大切です。

皆が個性を認め合い、誰もが周りの目を気にせず、笑顔でマスクを外す日が訪れることを、私は心から願っています。



「第三次世界大戦が起きるかもしれない。」

ウクライナの町が破壊され、人々が悲鳴をあげる姿をテレビで見て私はそう思った。

現在世界では、ウクライナ侵略や、アフガニスタン紛争など、約 60 もの紛争が起きている。その原因は、宗教問題や土地の争い、文化の差異など様々だ。これらの紛争により自分と同じくらいの年齢の子どもたちも、兵士として戦争に巻き込まれている。また、栄養失調や暴力により、命を落とす子どももいる。戦争によって、多くの子どもたちの命が奪われているのだ。さらに、地雷という兵器によって足を失った人も多く存在する。どうして、こんなに辛くて悲しい思いをしたり命や体の一部を失ったりしなければならないのだろうか。命とはそんなに軽く扱ってしまってよいものなのだろうか。

私は、生まれつき手足に麻痺がある。私の通う特別支援学校では、様々な病気を抱えた友達が自分のできることを精一杯頑張って一生懸命生きている。しかし、生きたくても生きられない人も中には存在する。私が小学生の時、同級生が病気で亡くなってしまった。母からそのことを聞いたとき、突然のことに驚き、私は大泣きした。この友達のように、生まれつきの病気で亡くなってしまう人もいる中で、戦地では、健康に生まれてきたにもかかわらず、戦争によって命を落とす人が多くいる。戦争がなければ、生きられた命をむやみに奪ってしまうのは、とても悲しいことだと思う。

また、私は手足の麻痺によって、日常生活の動作がどうしてもゆっくりになったり、思うように手足が動かなかったりする。例えば字を書くのにも時間がかかったり、手が震えて字がつぶれたりするため板書を書き写すのも一苦労だ。また、歩くときも、長い距離を歩くと疲れてしまい、他の人を待たせてしまう。そんな中で、多くの人が自分にとっては大変だと思うようなことも、簡単にこなしてしまう様子を見ると、羨ましいと感じてしまう時もある。そんな私にとって、五体満足で生まれてきた人が、戦争で命を失ったり、体に障害が残ったりしてしまうのは、もったいないことだと思う。

そもそも戦争は必要なことなのだろうか。私は、無意味なことだと考えている。戦争をするのではなく、お互いに納得がいくまで話し合えば、解決する問題だと思う。また、戦争を起こさないためには、お互いを尊重したり、思いやる気持ちが大切である。世界中の人々が、そんな思いやりの心を持つことができれば、戦争のない平和な世の中になるのではないかな。

この話し合うことと、お互いを思いやることは、世界平和だけでなく、普段の生活においても大切なことだと私は思う。相手の話を聞く前に、感情的に怒ってしまっていないだろうか。その発言は、相手の気持ちを考慮したものなのだろうか。話もせずに暴力で解決しようとしてはいけないだろうか。思いやりの心を持ち、一度立ち止まって考えてから発言や行動をし、冷静に話し合うことで、戦争の解決だけではなく、普段の生活においても、争いのないより良い生活を送れるのではないかなと思う。まずは日々の生活の中から争いをなくしていけるように心がけていくべきだ。

戦争は絶対にしてはいけない。いつか「戦争」という言葉を聞かなくなる世界になることを私は願っている。



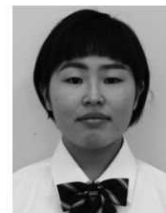
コロナ禍を過ぎ、日本を訪れる外国人旅行者数が増え続けています。訪日目的は観光やレジャー、伝統文化体験などが半数を占めています。外国人観光客からみた日本の魅力は伝統的な文化、自然や四季の美しさ、礼儀作法、おもてなしの心があるようですが、果たして私たちは外国人に日本の良さをどれだけ伝えることができるのでしょうか。今の若い人たちは流行を追いかけることは得意ですが、便利な世の中になりすぎて日本の季節の変化や歴史を当たり前のように考えているような気がします。

3年生になって一番最初の国語の授業で、「世界はうつくしい」という詩を読みました。この詩は、心に響く言葉がたくさん出てきたので、私の好きな詩だなと思いました。特に好きなところは、美しいものを美しいと言おう、行き交いの何気ない挨拶は美しいと、過ぎていく季節は美しいと、です。作者が思っている美しいものは物だけではなく、目に見えなくても感じることでできる美しいものだと思います。そして訪日外国人も同じような感覚を持っているのではないかと思います。私たちは、新しいものだけに目がいき、日本の日常の美しいものに気が付かなくなったり、気づいていても見過ごしてしまう生活になったりしているのではないのでしょうか。

私の親戚の同僚にスウェーデン人がいます。その人の名前はマーガレットさんといいます。先月、マーガレットさんが90歳になる母親を連れて、親戚の家に遊びに来ました。マーガレットさんは訪日は3回目ですが、日本の歴史や神社仏閣などとても詳しく知っています。90歳のおばあさんは初めての訪日でした。ずっと憧れていた日本に来てとても喜んでいました。食べ物では、お餅にすごく興味を持っていていました。お餅の材料、作り方、料理法など、細かいことに関心を持って質問をしてくれていました。それ以上に私が驚いたことは90歳のおばあさんが書道や着物、日本の発酵食品のことなど、とても勉強しており、色々なことを質問されたことです。その中で私が唯一教えてあげられたのは書道のことだけでした。日本のことでも、知らない

ことばかりで、私はなんだか恥ずかしい気持ちになりました。日本で生まれて、日本で育って生きていくにもかかわらず、簡単な質問にも答えることができないのはなぜでしょう。日本の国には独自の文化があり、先人の方々が造ってくれた素晴らしい歴史もあります。私たちの国は良い国だということに気づき、これから自分たちで良い国にしていこうという意識を持つべきだと思います。そのような意識を持った人が増えることがこれからの日本を良くしていくことにつながると考えています。9月に修学旅行がありますが、その行き先に京都が含まれています。京都には神社、寺院、自然、食文化、日本の歴史など魅力的な環境がたくさんあります。もし、外国人にこれらについて質問されたときに、少しでも教えてあげられるようになりたいと思っています。だから歴史のことなどについて、自分でしっかり学習してから足を踏み入れたいです。

日本には美しい言葉もたくさんあります。流行する言葉を使うのも楽しいし、おもしろいですが、同時に正しい日本語を学んでしっかり身につけ、使い分けができるような人になりたいと思っています。また、日本の祭りや着物、伝統工芸品なども未来に伝承していかななくてはいけないと思います。私たちは当たり前に1年を過ごします。けれど、日本の春夏秋冬は外国人にとってとても魅力的なものです。季節に合わせた日本の文化をもっと感じて、日本の自然も私たちが守っていかなければいけないと思います。美しいものや言葉に囲まれた日本に住んでいるのだから、日本人として優しさと誇りをもって生きていきませんか。



清水町立清水中学校 3年 坂部 いろ花

もし時間を巻き戻せるとしたら、もう会えない誰かに、何かを伝えられるチャンスがあるとしたら、あなたは誰に、どんな言葉を伝えますか？

「いつもありがとう、大好きだよ。」もし人生をやり直せるとしたら、私は祖母にこう伝えたいです。

私の祖母はいつも明るく元気な人でした。近所の人や仕事仲間から信頼され、頼られる人でした。よくお酒を飲んでいて、一口飲むと顔が真っ赤になり、話したことをすぐに忘れてしまう、そんなところもある人でした。

保育園の頃の私は、そんな祖母が苦手で、ずっと避けていました。祖母はそれに気づいていて、申し訳なく思っていたそうですが、幼い私はそのことに気づくことができませんでした。

そんなある日、突然祖母が亡くなりました。前日まで元気だった祖母が突然です。祖父はショックが大きすぎるあまり、その日を境に介護が必要なほど具合が悪くなってしまいました。その時私は小学1年生で、はじめは祖母がいなくなってしまった実感がありませんでした。祖母の葬式から2、3ヶ月経つと、葬儀の準備や片付けで慌ただしかった家もとても静かになり、いつも祖母が私の好きな料理を作ってくれたキッチンが、シーンと静まり返っていました。そこで私は祖母がもういない、ということを実感し、自分は取り返しのつかないことをしてしまった、という事実が私を襲いました。

私はそれからずっと自分を責め続けました。どうしてあんな態度を取ってしまったのだろう。どうしてももっと感謝を伝えられなかったのだろうと、後悔の言葉が何度も頭をよぎっては、1人で隠れて泣いていました。

そこから数ヶ月経ったある日、祖父母の家で、数冊のノートが見つかりました。それは祖母が書いた日記でした。中を見ると、そこに書いてあるのは家族や仕事仲間、知り合いへの感謝ばかりで、不満、人の悪口は一切書いてありませんでした。それを見て、再び涙が溢れてきました。祖母は普段から感謝を大切にしている、誰も見ていないところでも人を褒め、尊敬し、感謝していたのです。私はその

生き方をとてもカッコいいと感じ、深く尊敬しました。

そこから私は、今までよりも人や物を大切にするようになりました。足が不自由な祖父の手伝いや、母が忙しい日は代わりに朝食を作ったりするようになりました。これ以上、後悔したくなかったからです。私は祖母の死で、時間は戻らないこと、亡くなった人は帰って来ないこと、人の死は、多くの人に影響を与えることを学びました。だから、今あるものを大切に、真摯に、感謝しながらふれ合っていく人生を、私は選びます。

昨年、祖父が亡くなりました。死への悲しみや、もっと話せたのではないかな。もっと祖父を大切にできたのではないかなという悔しさは残りましたが、祖母を亡くしたときのような、押しつぶされそうな強い後悔はありませんでした。自己満足に聞こえるかもしれませんが、私は祖父とたくさん話をし、いっぱい感謝を伝えられたことで、この生き方を選んで本当に良かったと思いました。

今、私には伝えたいことがたくさんあります。両親には「こんなに元気に育ててくれてありがとう」。友達には「私と仲良くしてくれて、相談にも乗ってくれてありがとう」。先生には「いつも私を正しい道へと導いてくれてありがとう」という言葉を伝えたいです。

祖母との別れを通して、私は学んだことがあります。「誰もが、誰かの心に響く存在であり、人生に無駄なことはない」ということです。大切な人との別れは、もう二度と立ち上がれないのではないかなと思うほど辛い経験でした。しかし、時間が経ち、そんな経験から学ぶことができたと思っています。

いつもお世話になっている人に「私を支えてくれてありがとう」と伝えることは、まだちょっとはずかしくてできません。しかし、祖母に言えなかった分の「ありがとう」と「大好き」を、これからたくさんの人にいっぱい伝えていきたいと思います。

もし人生をやり直せるとしたら、あなたなら、何をしますか？



磐田市立豊田中学校 3年 山下 ひなた

コロナによって変わったことはありますか。

現在、コロナ禍後もマスクを外すことが出来ない若者がいる。「マスクを外すのが怖い。」「素顔を見られるのは恥ずかしい。」という記事を目にした。

私もそのひとりだ。私は必ずマスクを着け家を出る。

小学4年生の終わり頃、コロナの始まりが私のマスク生活の始まりであった。私の小学生の記憶はほぼマスク姿のみんなである。

コロナの流行とともにマスク着用は絶対となった。今までは、マスクをしていると風邪？とマスクを着けていることのほうが珍しいほどだったのに、生活は一変した。

感染対策でのマスク着用。初めはマスク生活に慣れず息苦しく外したいと感じることもあった。しかし次第に、マスクをしなければ感染してしまう。絶対に外してはダメ！というマスクへの絶対的執着心が私には生まれていった。

普段着けることのなかったマスクを強制させられる日々が続いていった。友達と会話をしている際ふと気付かされることがあった。あれ？この子は今、どんな表情をしているの？楽しそう？つまらなそう？マスクから出ている目だけで相手の本当の表情がわからないことは自分をひどく不安にさせた。

小学校の卒業アルバムの私たちはほとんどの写真でマスクを着用している。一度しかない瞬間を収めたアルバムなのに、表情が見えず、顔の半分以上が隠れている写真を見て虚しい気持ちになった。

そして私は中学生になった。入学し、初めて出会う子が大勢いるのにみんなマスク姿で素顔を知らずにいた。同じ小学校であった子たちでさえどんな顔だったっけ？とみんなの顔の記憶が薄れていた時期でもあった。

コロナ禍が終わり、2023年3月からマスク着用の呼びかけはなくなった。しかし、感染対策でのマスク着用の働きとは関係なしに私は常に着け続けていた。家を出る前、習慣的にマスクに手を伸ばしてしまう。更に予備のマスクもカバンに常備も変わらず。私のようにクラスでは大半の人がマスクを着

けていた。

マスクを着けて人と話すことに慣れてしまった私は、いざマスクを着けずに話す際、仲の良い友達でも緊張してしまう、恥ずかしい、と感じてしまうことに気付くようになった。話し方、笑い方、急にいつもの自分がわからなくなるのだ。

他人からの視線、容姿への評価、肌の状態、二重あご、マスクは自分のコンプレックス全てを隠してくれていたのだ。つまり、マスクは自分の体の一部のようなもので、マスクをしていないと自分は洋服を着ずに外に出てしまった様に感じる。私にとってのマスクは自分を守ってくれる鎧のような存在。他人の視線や余計なことを気にすることなく生活でき、思いっきり笑うことだってできる。

私の思春期、マスクという存在に私は救われていたのかもしれない。しかし、マスクに頼りすぎることで逆にマスクに囚われてしまうかもしれない。やはり、人との会話は表情が見えたほうが変な勘違い、不安を感じることなく、思いっきり笑ったり喜怒哀楽を表情でも共有したいし素顔も知りたい。そのために、自分に自信を持ち、自分磨きもして容姿へのコンプレックスもちっぽけに感じる強い自分になるきっかけを作っていく。

感染対策でしていた紙切れ1枚のマスク。息苦しく外したくて仕方なかったマスクがこんなにも私の中で大きな存在になるとは想像もしなかった。

マスクと上手く付き合える自分になれるよう私は成長していく。



私の通う服織中学校には、髪色や靴下の色の指定がありません。なぜ指定が無いのか先生に聞いたところ、

「中学生らしい身なりを自分で考えて判断してほしいからだよ。」

と言われました。他にも、制服を長袖から半袖に変えるタイミングは自由だったり、雨の日の登下校時にスカートで登校するか、ハーフパンツで登校するかだったりを自分で考えて判断する場面がたくさんあります。

また、日常生活でも自分が自転車を漕いでいて、前に人がいる時にベルを鳴らすか鳴らさないかなど、それぞれの判断が求められる場面が多くあります。前にいる人に気づいてもらうためにベルを鳴らした方が良いという人もいれば、ベルだと緊急時のような感じがしてしまうため、声をかけるだけの方が良いという人もいます。これは、法律やルールで決まっているわけではないので、ただ誰かが考えたものに従えば良いというわけにはいきません。だからこそ、すごく難しいと私は思います。

では、なぜこんなに難しいことが私たち中学生に求められているのでしょうか、それは、将来を生きていく力をつけるためだと私は考えます。

私たちの学校の体育祭は、一昨年までは朝から午後まで行っていましたが、昨年からは熱中症対策として、朝から昼までに短縮されました。時間が短縮されたことで、種目数を前回よりも減らしたり、応援披露の時間を無くし競技中の応援に変更したりして、時間内に収まるように私たちが考え判断しました。

今の世の中は、地球温暖化や森林破壊、円安での物価高騰など、昔では考えられなかったようなことがたくさん起きています。これから先、今の私たちでは想像もできないような大変なことが起こるかもしれません。そのような中で「例年通り」や「誰かが言っていた」は通用しません。これから先、何が起きても、その状況にあった判断が自分で出来るような「将来を生きていく力」をつけるため、中学生のうちから自分で考えて判断することが大切だ

と思います。

自分で考えて判断するということは、人の数だけ意見があるということになります。その時、自分の考えた意見と相手の考えた意見とで対立してしまうことがあるかもしれません。しかし、自分も相手も何か理由があってその判断をしたはずです。決定した内容より、決定した理由や過程を大切にして、更により良いものにしていけたらいいなと思います。

また、当たり前のことではありますが、「相手への思いやり」を忘れてはいけません。特定の誰かが悲しい思いや辛い思いをしないように、全員が気持ち良く過ごせる環境をつくれるように考えていくことも大切にしていきたいです。

これから私は、中学校を卒業し、上級学校へ進学します。高校は義務教育とは違い、大人に守られることが少なくなり、自己判断や自己決定を求められる場面が多くなります。そのために、中学生である今のうちから自分で考え判断することを大切にし、将来を生きていく力を身につけていきたいと思います。



「失敗してもいいから、挑戦してみよう」誰もが一度は聞いたことのある言葉です。しかし、本当に失敗してもいいのかと思う人もいるのではないのでしょうか。一步を踏み出すのが怖かった私も、挑戦することにおびえていた1人でした。

そんな私が初めて挑戦したのは、小学4年生の運動会でした。学年の前で感想を話す役を引き受けることになったのですが、緊張のあまり言いたいことをすっかり忘れてしまい、うまく話せませんでした。友達に助けてもらいなんとか終えることができたものの、失敗が恥ずかしくて、自信をなくし、ただうつむいていることしかできませんでした。そのとき私は「このままではダメだ、自分を変えたい」と強く思いました。

それから私は、自分を変えるために挑戦することを選ぶようになりました。中学生になって、思いきって学級委員に立候補しました。司会や呼びかけも初めての経験で、うまくいかず落ち込むことも多くありました。思いが伝わらず、くじけそうになったこともあります。それでも先生の言葉に励まされ、少しずつできることが増えていきました。みんなの前に立つ経験をしたことで、自分の中で「もっとこうだったらいいのに。」「こうしてみたいな。」とクラスや学校に対する思いも芽生えていきました。

そして、私の人生で一番の挑戦となったのが、生徒会選挙への立候補でした。選挙期間中は、「自分が吉田中学校をどんな学校にしたいのか」、「なぜこのスローガンにしてどんな思いを込めたのか」、「自分が生徒会長になったらどんな事ができるのか」朝も夜もずっと考えていました。悩み、何度も自信をなくしました。自分の良いところも見つからず、他の候補者と自分を比べてばかりでつらくなり、涙が出たこともありました。結果は落選。しかし、不思議と心は少しすっきりしていました。選挙に挑戦することを通して、自分自身と真正面から向き合うことができたからです。

その後、本部役員に立候補し、副会長として活動することになりました。行事の準備や運営に関わる中で、自分にできることが少しずつ増えていきまし

た。ポスター作りなど得意なことを活かせる場もあり、計画を立てて物事を進めること、人前で堂々と話すことにも慣れてきました。普通の生徒だった頃にはわからなかったリーダーたちの思いや裏での苦勞が見えてくるようになりました。自分が挑戦したからこそわかったことで、あのときとても迷い、とても悩んだけれど、挑戦してよかったと思っています。

今の私なら、「自分の良いところは何ですか」と聞かれたら答えられます。心配性な性格を活かしてミスを防いだり、デザインの力でみんなの目を引く工夫をしたり、自分にしかできないことがあると自信を持てるようになりました。

今でも、挑戦することは怖いですが、もし、あのとき挑戦することをやめていたらと考えると、私は今も自分自身と向き合えていなかったですし、自信も持てていなかったと思います。例え失敗したとしても、挑戦してみれば、何かが見えてくるはずですよ。だから私は、これからも「失敗してもいいから、挑戦してみよう」という言葉を信じて前に進みます。

講 評

今回の「わたしの主張2025 静岡県大会」は、どの発表者もご自身の経験等を基に、将来の希望や提案がなされ、今の社会や今の自分とどう向き合っていくのか、日々の生活を見つめ直す、よい機会を与えてくれる発表ばかりでした。また、発表態度も落ち着いており、聞き手に共感と感動を与える大変素晴らしいものでした。

ここで13人の発表を簡単に振り返ってみたいと思います。

静岡県西遠女子学園中学校 山下さん、「私を作るもの」と題し、バレーを通して培ったリーダーの在り方と自身のルーツであるブラジル、日本、両国の良さを踏まえたシチズンシップについて、15歳なりの見方・考え方を発表してくれました。

沼津市立愛鷹中学校 金田さん、日頃から障がい者に接する家族としての視点から、今の社会に対する問題提起をするとともに、今後の関わり方について皆さんへの提案として自分の考えを述べてくれました。

浜松市立佐久間中学校 樽松さん、過疎化が進む地元地域と向き合い、自分ができること、皆さんに考えてほしいことなど、建設的な考えを発表してくれました。地元愛がとても伝わってくる話でした。

三島市立中郷中学校 石渡さん、台湾ホームステイを通して、自分の見方・考え方が広がった体験談でした。「経験するかしないかは全て自分の選択」ととても印象に残る言葉でした。きっと今後のピアノ演奏にも大きな影響を与えてくれることでしょう。

静岡市立豊田中学校 一杉さんは「脱マスクの時代で」と題し、磐田市立豊田中学校の山下さんは「マスクとわたし」と題して、コロナ禍が過ぎてもマスクが外せない今の若者世代の気持ちをリアルに語ってくれました。多様性の時代と言われる今を生きる私たちの在り方や生き方を問う発表だったと思います。

静岡県立中央特別支援学校中学部 若林さん、昨今の侵略、紛争等の時事問題と、同級生の「死」、ご自身の肢体の状況を重ねて考え、平和な世界について思いや考えを発表してくれました。さらに日常生活に落とし込んだ「思いやり」の大切さも、発表から伝わってきました。

静岡大学教育学部附属浜松中学校 徳永さん、最近のAIにも関連する話ですが、翻訳アプリの使用の有無と、その違いによるコミュニケーションの違いについて、自身の海外体験談を踏まえてこうあるべきという話をしてくれました。「心の会話」という言葉も素敵でした。

御前崎市立浜岡中学校 伊藤さん、日本人として、私たちが大切にすべきことは何か、私たちに託されたものは何かということでご自身の見方・考え方を語ってくれました。伊藤さんが9月の修学旅行でまた新しい何かを発見することを期待しています。

清水町立清水中学校 坂部さん、祖母との別れをとおして学んだこと、その後の自分の生き方、考え方。とても伝わってくるものがありました。平凡な日常が送れるのも、周りの人たちのお陰です。改めて「ありがとう」を伝えていきたいと思える発表でした。

静岡市立服織中学校 芹沢さん、ご自身の学校生活を話題にし、当たり前が当たり前でなくなっている今の時代と、それを生きる私たちの見方・考え方について提案してくれました。自己判断、自己決定を積み重ねた芹沢さんの今後がとても楽しみです。

沼津市立片浜中学校 加藤さんの「人間になった僕ができること」。ショートストーリーのような話の展開でとても興味深く発表が聞けました。「言葉の処方箋」という表現も素敵でした。

吉田町立吉田中学校 堀川さん、ポジティブに挑戦する姿が発表から伝わってきました。挑戦することは怖いけど、チャレンジすることで自分の良さを見つけることができました。今日この会場にいる一歩をなかなか踏み出せない人へのエールにもなったと思います。

改めて、どの発表者も、周りの人たちとの関わりや、さまざまな体験の中で自分を見つめ、自分の生き方を丁寧に振り返っていました。また、自分なりに課題を正面から受け止め、力強く前進していこうという実践意欲の高い発表ばかりでした。

この大会を通じて皆さんの熱い気持ちを感じることができ、私は大変嬉しく思います。ありがとうございました。

最後になりますが、本大会に携わっていただいたすべての方々に感謝を申し上げ、講評といたします。ありがとうございました。

審査委員長 堀内祥行

大会の様子

令和7年8月21日（木）御前崎市民会館



◇あいさつ
静岡県教育委員会
池上 重弘 教育長



◇あいさつ
御前崎市
下村 勝 市長



◇最優秀賞・共感賞
加藤 蒼士 さん
（沼津市立片浜中学校）
共感賞は、来場した中学生
の投票によって選ぶ特別賞



◇優秀賞
金田 ゆな さん
（沼津市立愛鷹中学校）



◇優秀賞
樽松 里哉 さん
（浜松市立佐久間中学校）



◇優秀賞
徳永 梨良 さん
（静岡大学教育学部附属
浜松中学校）



◇アトラクション
なぶら御前太鼓保存会のみなさん



◇集合写真

大会の様子

◇大会運営に御協力いただいた御前崎市の中学生のみなさん

司会



縄巻 晴人 さん(御前崎市立浜岡中学校)

飛澤 文音 さん(御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校)

	御前崎市立浜岡中学校	御前崎市牧之原市学校組合立 御前崎中学校
受付・誘導	松下 叶 さん 鈴木 麻友 さん 山田 ゆな さん 朝比奈 ゆず さん 熊倉 みう さん 内山 咲耶 さん 佐々木 さち さん 鈴木 結菜 さん 河原崎 慎治 さん	竹村 結衣 さん 植田 かな さん 曽根 小葉 さん 増田 さとみ さん
中学生審査員 代表	永田 紅葉 さん 山本 亜美菜 さん 高橋 良菜 さん 戸塚 紗英 さん	小泉 波織 さん 高塚 日和 さん
表彰式補助	高畑 菜々美 さん	木村 結奈 さん
アンケート 回収	森 優月 さん 水野 希依 さん 萩原 琉華 さん 松井 梨乃 さん	増田 波珠 さん 澤部 夏希 さん

運営への御協力ありがとうございました！

「わたしの主張 2025 静岡県大会」 開催概要

- 1 主 催
静岡県教育委員会、静岡県青少年育成会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 2 共 催
御前崎市教育委員会
- 3 後 援
静岡県校長会、静岡県私学協会、静岡県PTA連絡協議会、静岡県私学保護者会
- 4 日 時 令和7年8月21日（木）大会：午後0時40分から4時まで
- 5 会 場 御前崎市民会館（御前崎市池新田 5585）
- 6 次 第
12：00 開 場
12：40 開 会
・あいさつ（御前崎市、静岡県教育委員会）
・審査委員紹介
・発表上の注意（審査委員長）
13：00 主 張 発 表
14：50 アトラクション
共 感 賞 表 彰 （中学生審査員代表）
講評・成績発表 （審査委員長）
表 彰 （最優秀賞1点、優秀賞3点、優良賞9点）
16：00 閉 会
- 7 出 場 者 13人（静東・静西教育事務所管内8人、
静岡市2人、浜松市2人、御前崎市（開催地）1人）
- 8 審査委員
委員長 堀内 祥行 （静岡県校長会 理事）
委 員 鈴木 政昭 （公益社団法人静岡県私学協会 西部支部長）
森 浩子 （静岡県PTA連絡協議会 理事）
山崎 善啓 （株式会社静岡新聞社 編集局論説委員兼編集委員）
牧野 正和 （静岡県立大学 教授）
佐藤 建 （静岡大学大学院 学生）
鈴木 恵子 （静岡県青少年育成会議 副会長）
- 9 審査方法
・主題に基づく発表内容及び発表表現、態度を審査する。
・発表は5分程度とし、5分30秒を経過した場合は減点の対象とする。
- 10 表 彰
以下のとおり、賞状及び記念品を授与する。
最優秀賞1人、優秀賞3人、優良賞9人
（これらのうちから共感賞（中学生審査員による特別賞）1人）

わたしの主張 2025 静岡県大会 原稿募集要領

1 趣旨

わたしの主張 2025 静岡県大会実施要綱に則り、原稿募集に関する必要な事項を定める。

2 内容

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わり。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言。
上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを少年らしい自由にユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

作品は未発表、自作のものに限ることから、主張作文の執筆時・推敲時には、生成 AI を利用してはならないことを担当教員は指導すること。

3 応募資格

令和 7 年度に静岡県内に在住する中学生及びそれに相応する学籍にある者。

※国籍は問わないが、日本語で発表できること。

4 応募原稿

(1) 応募原稿について

- ア 400 字詰め原稿用紙（A 4 版または B 4 版、縦書き）4 枚程度。各ページにはページ数を付けること。
- イ 本人直筆とし、原本を提出すること。（パソコン・ワープロ原稿は認めない。但し障害等によりやむを得ない場合はパソコン・ワープロ可）
- ウ 5 分 30 秒以内で話し言葉による発表ができる内容とする。
- エ 提出原稿の加筆、修正は認めない。
- オ 原稿用紙には HB より濃い鉛筆ではっきりと記入すること。

(2) 原稿の書き出しについて

作文の原稿用紙への記入は、右のように、

- 1 行目に原稿タイトル
- 2 行目に県名・学校名・学年
- 3 行目に発表者の氏名
- 4 行目以降に本文 とする。

4 行 目	3 行 目	2 行 目	1 行 目
本 文	氏 名	静 岡 県 学 校 学 年	タ イ ト ル

5 提出方法

各学校は、応募者 2 人以内を選び「6 応募締切・提出先」に示す期日までに原稿を提出する。提出の際は、【別紙 1】「応募票」を添付すること。

各市町（静岡市・浜松市を除く）は、学校からの応募をとりまとめ、【別紙 2】「一覧」を 6 月 3 日（火）までに県教育委員会社会教育課へ電子メールで提出し、原稿は郵送又は持参にて 6 月 5 日（木）までに県教育委員会社会教育課へ提出する。（必着）

静岡市・浜松市は、各市で県大会出場者を決定し、7 月 29 日（火）までに県教育委員会社会教育課に連絡する。

6 応募締切・提出先

※ 私立中学校にあつては、各校所在市町への提出も可。

学 校 種	応 募 締 切	提 出 先
市町立中学校（義務教育学校後期課程を含む）	各市町の定める日	各市町の定める提出先
国立中学校・県立中学校	各校所在の市町の定める日	各校所在の市町の提出先
私立中学校・特別支援学校	6 月 5 日（木）	県教育委員会社会教育課

7 留意点

- (1) 原稿は未発表、自作のものに限る。
- (2) 大会で発表された原稿は、発表文集やホームページ等で公表するので、その旨各学校において生徒、保護者に対して十分周知しておくこと。
- (3) 発表に際しては、パフォーマンス（服装の工夫、小道具の使用等）を取り入れてもよいこととする。
- (4) 商業的な固有名詞の使用や、個人名の使用は極力避けるようにする。
(悪い例：〇〇県にある〇〇旅館 良い例：〇〇県にある旅館 など。)

8 問合せ先

静岡県教育委員会社会教育課

〒420-8601 静岡市葵区追手町9番6号 (静岡県庁西館8階)

電 話：054-221-3305、3312 F A X：054-221-3362

電子メール：kyoui_shakyo@pref.shizuoka.lg.jp

わたしの主張2025静岡県大会 審査基準

1 審査観点

- (1) 論 旨
(内容)
 - ・中学生らしい鋭い感性で、新鮮な主張であるか。
 - ・主張の内容が個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
 - ・説得力があり、聞き手に感銘や共感を与えるか。
 - ・希望や提言、提案を実現・実践する意欲が感じられるか。
 - ・論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- (2) 表 現
発表態度
 - ・話しぶりに熱意と迫力が感じられるか。
 - ・聴衆に深い感動や強い印象を与えていたか。
 - ・美しく正しい日本語で話されているか。
 - ・明朗で落ち着いた発表態度であるか。

- 2 発表時間 5分程度とし、5分30秒を経過した場合は減点する。

3 採点方法

- (1) 各審査委員は、
 - ア 論旨については、普通程度を14点とし、20点満点で採点する。
 - イ 表現・発表態度については、普通程度を7点とし、10点満点で採点する。
 - ア、イの合計の30点満点で採点する。
 - ウ 発表時間が5分30秒を経過した場合は、10秒ごとに各審査委員が1点ずつ減点する。
- (2) 審査委員会は、審査委員ごとに(1)の得点の上位4人に、それぞれ4点、3点、2点、1位の順位点を与える。なお、得点が同点の場合には、当該審査委員が同点者の順位を判定する。
- (3) (2)の各審査委員の順位点の合計を発表者の得点とする。

4 選 考

3の結果に基づき、審査委員の合議により、最優秀賞1人、優秀賞3人、優良賞9人を選考する。
共感賞1人は中学生審査員の合議により選考する。

「わたしの主張 2025」地区審査会出場者

【静東・静西地区】作文最終審査会

令和7年7月10日 静岡県庁

	題 名	氏 名	学 校 名	学年
静 東	人間になった僕ができること	加藤 蒼士	沼津市立片浜中学校	3
	向き合って見える世界	金田 ゆな	沼津市立愛鷹中学校	3
	食わず嫌いをやめて	石渡 葉奈	三島市立中郷中学校	3
	「生きた証」を残すために	鈴木 ひより	御殿場市立富士岡中学校	3
	「働く」ということ	河西 凜	裾野市立西中学校	3
	大丈夫	小林 杏	裾野市立深良中学校	3
	伝えたい思い	坂部 いろ花	清水町立清水中学校	3
	「大丈夫？」	佐藤 明妃	不二聖心女子学院中学校	3
静 西	それで終わりではない	小栗 良介	御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校	3
	挑戦を恐れない	堀川 莉花	吉田町立吉田中学校	3
	マスクとわたし	山下 ひなた	磐田市立豊田中学校	3
	努力	青木 叶子	磐田市立南部中学校	3
	言葉ではないコミュニケーション	古山 愛結	袋井市立周南中学校	3
	戦争のない世界へ	若林 純那	静岡県立中央特別支援学校中学部	3
	性の違い	菅田 恵以	磐田東中学校	3
	私を作るもの	山下 ラリサ	静岡県西遠女子学園中学校	3

【静岡市】静岡市公開審査会

令和7年7月28日 静岡市役所 清水庁舎

題 名	氏 名	学 校 名	学年
不登校について	大澤 汐織	静岡市立大川小中学校	8
A I の進化と人間の強み	鈴木 優萌	静岡市立蒲原中学校	3
脱マスクの時代で	一杉 奈緒	静岡市立豊田中学校	3
「挑戦」から得られたもの	寺林 桃花	静岡市立清水第一中学校	3
やりきること	上岡 希衣奈	静岡県立清水南高等学校中等部	3
大切な日常	深澤 萌	静岡県立清水南高等学校中等部	3
メディアをやめてできること	前島 扇	静岡市立長田西中学校	3
人として	小松 さくら	静岡市立清水第七中学校	3
中学生である今、私たちに求められていること	芦沢 真央	静岡市立服織中学校	3

【浜松市】浜松市大会

令和7年7月28日 クリエイト浜松

題 名	氏 名	学 校 名	学年
六歳の心で十歳を生きる妹	夏目 茉依	浜松市立新津中学校	3
より深く関わっていくために	松本 克哉	浜松市立高台中学校	3
便利さの裏側	宇野 清太	浜松市立春野中学校	3
地域と自分	樽松 里哉	浜松市立佐久間中学校	3
自分の気持ちは自分で	安形 茉緒	浜松市立細江中学校	3
真のコミュニケーション	徳永 梨良	静岡大学教育学部附属浜松中学校	3
苦しい時こそ周りを見られる人に	榊原 真歩	静岡県立浜松西高等学校中等部	3

「わたしの主張 静岡県大会」のあゆみ

回数	年度	開催地	参 加 学校数	応募者数 (*は概数)	最優秀賞受賞者		
					氏 名	学 校 名	全国大会
1	昭 54	静岡市		320	内田 あゆみ	掛川市立東中学校	
2	55	静岡市		4, 871	外木 佳織	富士宮市立富士宮第一中学校	
3	56	静岡市		5, 952	上村 寿美乃	御殿場市立富士岡中学校	
4	57	静岡市		8, 681	西島 小映子	熱海市立多賀中学校	
5	58	静岡市		*8, 000	佐野 禎子	富士市立吉原第二中学校	
6	59	静岡市		8, 783	稲垣 みな江	誠心中学校	全国大会出場
7	60	静岡市	131	11, 505	小関 勝也	沼津市立第三中学校	
8	61	静岡市	145	13, 787	後藤 弘子	富士宮市立富士根南中学校	
9	62	静岡市		15, 233	白柳 由紀絵	浜松市立東部中学校	
10	63	静岡市	157	18, 543	大石 寿宏	島田市立島田第一中学校	総務庁長官賞
11	平元	袋井市	289	14, 212	岡本 聖子	掛川市立栄川中学校	
12	2	函南町		14, 196	岩城 吏	函南町立函南中学校	
13	3	掛川市		18, 212	河野 岳信	掛川市立桜が丘中学校	
14	4	浜松市		21, 124	櫻井 葉津記	袋井市立袋井中学校	
15	5	三島市	148	20, 577	小澤 真子	三島市立北中学校	
16	6	島田市	147	21, 900	向笠 美里	榛原町立榛原中学校	
17	7	三ヶ日町	151	21, 982	市川 由美	天竜市立下阿多古中学校	
18	8	御殿場市	159	24, 279	露木 義章	沼津市立第五中学校	審査委員会特別賞
19	9	藤枝市	201	20, 178	片岡 亮太	県立沼津盲学校中学部	全国大会出場
20	10	浜北市	165	17, 957	大野 浩太	天竜市立下阿多古中学校	全国大会出場
21	11	沼津市	170	17, 722	西谷 修一	森町立旭が丘中学校	全国大会出場
22	12	静岡市	170	17, 481	大鐘 さやか	相良町外一ヶ町菊川町学校組合立牧之原中学校	
23	13	浜松市	180	17, 973	河井 千佳	下田市立稲生沢中学校	審査委員会特別賞
24	14	富士市	184	18, 008	原 兆子	修善寺町立修善寺中学校	

「わたしの主張 静岡県大会」のあゆみ

回数	年度	開催地	参 加 学校数	応募者数 (*は概数)	最優秀賞受賞者		
					氏 名	学 校 名	全国大会
25	平 15	掛川市	185	19,804	高橋 由美香	富士市立岩松中学校	
26	16	袋井市	182	19,176	前川 ミドリ	浜松市立可美中学校	
27	17	三島市	172	18,958	潘 欣	沼津市立沼津高等学校中等部	全国大会出場
28	18	静岡市	181	17,562	許 曉晗	沼津市立今沢中学校	
29	19	浜松市	186	17,946	横井 香保	浜松市立可美中学校	
30	20	富士市	174	15,191	宮下 淳子	三島市立北上中学校	
31	21	掛川市	185	16,287	瀧谷 美紀	牧之原市立相良中学校	(独)国立青少年教育振興機構理事長賞
32	22	磐田市	175	15,876	内村 綸笑	沼津市立第三中学校	内閣総理大臣賞
33	23	沼津市	175	15,628	田代 奈都江	御殿場市立御殿場中学校	
34	24	菊川市	178	18,437	飯山 亜美	御殿場市立原里中学校	全国大会出場
35	25	浜松市	161	15,446	勝又 彩	沼津市立浮島中学校	
36	26	伊豆の国市	172	15,326	河守 佑夏	御前崎市牧之原市学校組合立御前崎中学校	
37	27	島田市	166	14,404	安藤 綺更	静岡大学教育学部附属静岡中学校	
38	28	袋井市	170	14,208	持田 朋花	沼津市立門池中学校	
39	29	函南町	159	13,397	原口 結菜	函南町立函南中学校	
40	30	静岡市	161	14,720	内山 ほの葉	浜松市立佐久間中学校	審査委員会委員長賞
41	令元	磐田市	160	14,076	望月 香琳	静岡市立清水両河内中学校	審査委員会委員長賞
42	2	静岡市	135	10,092	村松グルン良智美	浜松市立北浜中学校	審査委員会委員長賞
43	3	静岡市	150	12,300	勝又 悠翔	御殿場市立高根中学校	
44	4	森町	143	11,464	影山 夏希	浜松市立与進中学校	
45	5	長泉町	135	11,487	大城 柚稀	沼津市立長井崎小中一貫学校	
46	6	藤枝市	144	12,506	鈴木 颯太	浜松市立神久呂中学校	全国大会出場
47	7	御前崎市	138	9,391	加藤 蒼士	沼津市立片浜中学校	

伝える

鳥取県 鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年 谷口 鉄馬^{たにぐち てつ ま}

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を3度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に1度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。

母は「鉄馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまっでごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうに、お金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学1年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は1つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。

教育の光と私の願い

岐阜県 各務原市立蘇原中学校 3年 イクバル ラリナ

私の名前はイクバルラリナです。パキスタンの北にある、スワートという美しい谷から2年半前に来ました。はじめに、私の父が言ってくれた言葉を紹介させてください。

「たとえ声がふるえても、真実を話さない。あなたの声は、だれかの希望になるかもしれない。」

この言葉があるから、今日、わたしはここに立っています。小さな声ですが、大きな夢をもっています。

スワートはとてもきれいなところですよ。春になると、谷には色とりどりの花が咲きます。川の水は青くて冷たく、山には白い雪がのっています。人々はやさしく、笑顔であいさつをしてくれます。でも、わたしの子ども時代は、ずっと平和ではありませんでした。小さいころ、音楽が禁止され、テレビも見たいいけないと言われました。そして、いちばん悲しかったのは、「女の子は学校に行つてはいけない」と言われたことです。わたしはとてもこわかったです。でも、「わたしも勉強がしたい」「わたしにも夢がある」そう思っていました。

マララ・ユスフザイさんもスワート出身の女の子でした。彼女は「教育は私の権利」と世界に向けて声を上げました。その声は、大きな力になりました。私もこの言葉に大きな勇気をもらいました。私も教育の力を信じています。教育は、光です。教育があれば、自分の力を知ることができます。夢を見ることができます。そして、自分を大切にできます。わたしの家族はわたしを応援してくれました。

「勉強すれば、なんにでもなれるよ」と父と母から言われました。

日本に来た時、新しい世界が待っていました。言葉・文化・食べ物もすべてが違っていました。同じことが2つありました。

それは、尊敬することの大切さと教育の力です。日本では、いつも私が夢を見ていたものが見られました。それは、女の子と男の子が、一緒に学ぶ学校です。みんなに教科書があり、きれいな教室があります。やさしい先生たちがいて、自分が成長できる安全な場所です。私は、クラスのみんなが考えたり、疑問をもったり、創造したりすることを教えられているのを見ました。そして、

何よりも自由を見ました。学校は安心で、心強い場所です。日本は、すべての子供たちに平等で自由になれる教育を与えてくれました。そして、どんなこともできると私に教えてくれました。

私は将来やりたいことが見つかりました。それは、英語の先生になることです。英語が好きだからというだけではなく、他の人が世界中に向けて話せるよう手伝いたいからです。英語は教育やたくさんのチャンス、そして世界中の人と友達になるきっかけを開くドアです。

いつかパキスタンに帰り、すべての女の子が安全で自由になれる学校をつくりたいと思います。私は、パキスタンの女の子に「あなたは大切な人です。あなたの声が大切です。あなたの夢はかないます。」と言いたいです。そして、私の村の親たちに言いたい。「女の子たちに教育を受けさせましょう。女の子が教育を受けることは、家族全員の希望だからです。」と。

私はまだ14歳です。しかし、私の夢は大きく、希望で満ちています。世界を変えるのに、若すぎることはないと思います。若いからまだまだできることがあります。

私は自分のために話しているわけではありません。今も学校に行けるように待っているスワートのすべての女の子たちのために話しています。教科書を隠さなければならないすべての子供たちのために話しています。

そして、私はここで、どこに生まれたかに関係なく、すべての子どもが学ぶ権利をもつ世界を信じている、すべての人々に語りかけています。

私の人生に光を与えてくれた日本に感謝します。そして、スワート、私に力を与えてくれてありがとう。

私の両親、特に私の声を信じてくれた父に感謝します。



「わたしの主張2025静岡県大会」発表文集

発 行 令和8年1月

発 行 者 静岡県教育委員会 静岡県青少年育成会議

編 集 静岡県教育委員会社会教育課

〒420-8601 静岡市葵区追手町9番6号

電話番号 054-221-3305、3312

E-mail kyoui_shakyo@pref.shizuoka.lg.jp



「地域の子供は、地域の大人が育てる」

静岡県の子供・若者の健やかな成長を支えます！

静岡県青少年育成会議